

教会会報

川畔の尖塔

日本キリスト教団札幌教会

朽ちないものを着る



牧師

米倉 美佐男

コリントの信徒への手紙一

一五章五〇〜五八節

「この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」(五三節)

主イエス・キリストの復活は私たちの信仰の中心です。が、死人の復活などありえないと一笑にふす人々がいることもまぎれもない事実です。今も昔も。コリントの教会でも復活の事は大問題でした。パウロはこの問題を真正面から取り上げて語ります。ユダヤ教からキリスト教に改宗したパウロは十字架と復活の主に出会ってから人生

を百八十度転換させられ、福音の中心である十字架と復活なくして救いはないとの確信を彼は与えられました。

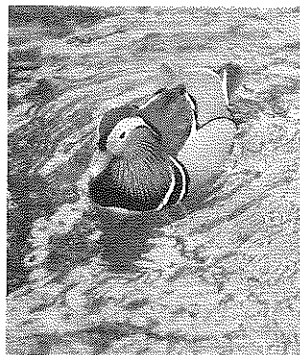
パウロは自分に与えられた信仰をコリントの教会の人々に受け継いでもらいたいと願ったのです。主の体なる真実の教会となるために妥協することのできない教会の命を伝えたいのです。

信じない人々からではなく、教会に属する者たちの中から死人の復活などない、と言う人々がいるのは一体どうしたことだ、とパウロは言います。死人の復活を否定することはキリストの復活も否定することになる。それは事実上信仰を否定することであり、伝道することができなくなり、信じるか否かは別として、十字架の出来事は歴史上の紛れもない事実です。しかし、復活はすべての人が信じ、受け入れる事は難しい事です。けれども復活がなかったとしたら私たちの信仰の根拠はなくなってしまう。

コリントの教会の人たちは大多数がギリシア人でした。ギリシア的思想によれば肉体と霊魂は二分され、まったく別個のものです。肉体は霊魂に比して卑しく死後塵に

なり、霊魂は不滅である。パウロはこのような考えに真つ向から挑みました。肉体と霊魂は分かち難く、人間は両者からなる一つの存在であって、死は両者を飲み込んでしまう。人間はそのままでは朽ちる存在なのです。その朽ちるものが朽ちないものを着るチャンスが与えられている。パウロはここで神秘を告げます。神の啓示の事柄として信仰によって私たちは生きるにしても死ぬにしてもキリストのものなのだと告白しています。生きることがキリストであり、死ぬるも益であると申します。

私たちにとって、死は終わりではありません。死に勝利されたキリストが今もここにいらっしゃるからです。主のご復活を祝い、共に主の真の礼拝者として生かされましよう。



二〇一二年札幌教会全体懇談会

「信仰の継承」——主を伝える——

2月19日

ヨハネによる福音書六・三五

イエスは言われた。「わたしは命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」

発題

序

昨年一二月九日に初孫が与えられ、一月の二二日に前任地の聖和教会で幼児洗礼を授けていただきました。息子は幼児洗礼を受けたことを長い間、良く思っていないが、私の父と私の思いを受け入れて決心してくれたようです。彼の希望を教会が受け入れてくださり実現しました。幼児洗礼は家族だけでなく神の家族としての教会の問題です。

1 命の糧を味わう

今回の全体懇談会の主題は「信仰の継承」です。サブタイトルにあるように「伝道」という視点がキーワードです。

主イエスを伝えるために何を継承するか

が大事です。

伝道とは道である主イエス・キリストを伝えることであり、神の家族としての教会を建てることです。

「教会とは聖なる会衆であって福音が純粹に宣べ伝えられ、聖礼典が正しく執行される場所である（アウグスブルク信仰告白）。

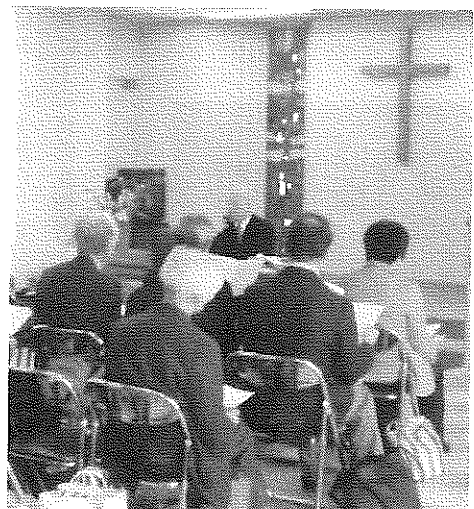
教会は信仰告白共同体であることをみ言の説きあかしである説教と、正しい聖礼典の執行において真の教会となるのです。

「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」（コリント一 一〇章二六―二七節）

聖餐においてキリストを礼拝し、命の糧であるキリストを味わうのです。キリストと一体になること、それが礼拝です。

2 教会とは

教会が生きた主の体であることを味わうために真実の群れとしての教会になることを祈り求めましょう。教会は誰のものか。



主イエス・キリストのものです。もちろん私の場合、私たちの教会であっていいのです。ただ、主権はキリストにのみあるのです。教会が教会であるために、教会が教会となるために何を継承し、伝えるかがはっきりしていなければなりません。何を伝えてよいか分からなければ、いつの間にか教会が教会でなくなりかねないのです。教会に自分の満足を求めたり、自己実現の場にすり替えることがないように注意しなければなりません。

教会には主が与えてくださった確かな約束があります。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしは

「もその中にいるのである。」(マタイ一八・二〇)。

「教会全体が一緒に集まり、皆が異言を語っているところへ、教会に来て間もない人か信者でない人が入って来たら、あなたがたのことを気が変だとは言わないでしょうか。反対に、皆が預言しているところへ、信者でない人か、教会に来て間もない人が入って来たら、彼は皆から罪を指摘され、心の内に隠していたことが明るみに出され、結局、ひれ伏して神を礼拝し、「まことに神はあなたがたの内におられます」と皆の前で言い表すことになるでしょう。」

3 結び

私たちは主の体である教会を建てることを祈り求めます。そしてそこに、まだキリストを知らない方々に主イエス・キリストを伝えるために招きましよう。

私たちが継承するのは、主の十字架と復活を正しく伝える教会です。聖礼典を大切にしている教会です。ここに唯一の確かな救いがあることを伝えて参りましよう。私たちの大事な家族や隣人たちに。



報 告

宣教委員会

今年も昨年同様、全体懇談会を開催することとしました。役員会のできるだけ具体的なテーマを、との提案により、「信仰の継承」―主を伝える―に設定し、発題を米倉美佐男牧師にお願いました。今年の出席者は50名で森熊治郎宣教委員長の開会祈祷・司会により開会。米倉美佐男牧師の発題の後、五分団に別れ約一時間話し合いの

- 時を持ちました。その後全体懇談会で各分団の報告をしていたとき、その報告について質疑の時を持ち、信仰の継承に対する認識を共有することができました。榮英彦牧師のお祈りを持って閉会いたしました。
- 各分団の報告の紹介をいたします。
- ・クリスチャンになったきっかけについて話しあつた。
- ・家族への伝道はそれぞれが苦勞している。
- ・教会へ初めて来た方への対応が難しいけれど、大切。
- ・お互いに分かり合えてよかった。
- ・札幌教会の現状に危機感を感じる。
- ・ホームページを改善して伝道に有効活用するべきだ。
- ・祖父母、両親が熱心なクリスチャンは伝道の継承がしやすい。
- ・私たちの力には限界があるが、信仰の種はすでにまかれている。
- ・永眠者記念礼拝に来た方へ、こころの友を送つてはどうか。
- ・など、各分団ごとに話し合ったことの報告があり、問題点ややるべきことなどを共有することができました。

主の復活
ハレルヤ!



よみがえり
甦りの日



宮下 泉

一、帰れつばくら 海を越えて

あがれひばりよ 雲の上へ

今日こそ うれしき

よみがえりの日ぞ

二、琴をかなでよ 小川の水

春の調べを 遠くはこべ

今日こそ栄えある

よみがえりの日ぞ

今から八十年ほど前、私たち四姉妹は教会への四キ口、大木の繁る山の中や、古墳だったというお茶山がいくつもあり、人攫いが出るかも、という磐田ヶ原を声を張りあげて歌いつつ日曜学校へ行きました。菜の花畠に蝶が舞い、声に驚いたひばりがとび出したり、イースターは人間も自然も喜びに溢れる時でした。

小樽公園通教会から転入したのは、一九八六年三月三十日のイースターの日で、主人が一月十日に召されたので、今までと異なった生活へ甦る日になりました。いと伯母、美子姉、キク枝姉、冬子姉、歌子姉がとも喜んでくださいました。幌西小に勤めた時の学年主任だった鈴木繁兄の奥様からはじめて声をかけて頂いて大変嬉しく思いました。

あれから二十六年、多くの方が帰られた天が慕わしく思われるこの頃です。

日本列島が地震・津波・放射線に襲われて、世界中の人々が復旧への祈りを合せて下さってから一年になります。多くの生命が奪われ、今なお苦難の生活を強いられいている方々が多いのですが、廃墟化した地にも生命は確実に芽生え、復興への歩みが見えはじめました。他人への思いやり、家族の絆の確認など、今まで忘れかかっていた事柄に気付かされて、新しい力が育っています。天地を創造され、それを見て、良しとされた主の深い深い愛に感謝です。すべての事に時がある。時間はかかるでしょうが、日本の甦りを信じて祈ります。インマヌエル・アーメン

鎌倉雪ノ下教会でのイースター



吉成 晃

イースターの思い出と言ったら、やはり「宝探し」。それは教会学校に通う子どもたちにとつてのビックイイベントなのです。

イースターの朝、いつもより早い時間に集合した僕ら。先生に率いられていざ出発です。道や小川やそら辺の雑草さえも、桜の花びらに飾られて、春を楽しんでいるようです。緩い坂道をしばらく登ると、見えてきました。源氏山公園です。

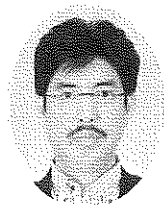
青空のもと、教会学校の始まりです。主の復活を祝う礼拝が終わったら、ゴザを敷いてみんなでサンドイッチを食べます。注意しなくてはならないのは、お弁当ハンター・トンビです。彼らは空から突然やってきて、手に持っているお弁当を持ち去ってしまふのです。この日も、狡猾なトンビが頭上をぐるぐると回り、僕らのサンドイッチに目を光らせていました。しかしながら、この日は彼らの襲撃はなく、トンビハンターの僕としては悲しいことではありません。

食事が終わると、お待ちかね、「宝探し」です。「宝」は、源氏山公園のあらゆる所に隠されていて、子どもたちがそれを探し出すのです。ゲーム開始の号令とともに、僕らは走り出します。一年間、このゲームのために訓練を積んできたのです。さらに、公園のどこなら隠しやすいか？などという情報もしつかり頭に入っていたので、低学年の子たちより多く見つけ出せると確信していました。今思うとオトナ気ないですね。

岩の間から、ツツジの生垣から、八重桜の幹のくぼみから、次々と綺麗なセロハン紙で包まれたイースターエッグを見つけていました。低学年の子たちを差し置いて、両手で持ちきれない程の宝を持って走り回っていました。

そんな姿を見かねたのか、それとも学年が上がったからか、次の年からは「宝」を隠す役に回されました。木の上とか無茶苦茶な場所に隠したので、当然のことながら苦情が絶えませんでした。しばらく遊んでから、山桜のアーチをくぐって教会に帰って解散。その日の晩と翌朝は必ず、獲得した大量の宝が食卓に並び、卵ばかりはつらいと思ひながら復活を祝ったものです。

イースターって何？



佐藤 大志

縁あってキリスト教主義の高校に勤めてから、今日でちょうど二十年になりました。これまで、喜怒哀楽あふれる日々を過ごしてきたように思います。ちなみに、キリスト教主義とはいえ、キリスト者の生徒はごく僅かです。ただ、「聖書」の授業に加えてキリスト教に関連した数々の行事もあり、生徒がキリスト教に触れる機会は少なくありません。

十数年以上も前のことですが、生徒が学校暦を見ながら「イースターって何？」と尋ねてきました。拙いながらも説明すると、「復活の奇跡は事実なの？」という問いが続きます。細かなことは割愛しますが、単に真偽を伝えたりすることはせず、「事実かどうかに関わるのではなく『復活の奇跡』にどのような意味があるか想像してごらん」と促しました（無責任？）。生徒が何らかの答えに辿り着けたかはともかく、生徒なりに私の促しを受け止めても

らえたとは思っています。その後、現在に至るまでさまざまな生徒から同じような問い（イースターに限らず）をされました。その度、「想像してごらん」と促していますが、生徒の受け止め方は変わってきている、想像することはせずに真偽を明らかにすることに拘る度合いが、だんだんと大きくなってきているというのが実感です。

真偽、善悪、可否、好悪。全肯定・否定しかないような対極的視点で物事を捉えずぎるきらいが、高校の教育現場だけでなく、社会のさまざまな局面で見られるというのは言い過ぎでしょうか。加えて、そのような状況では「想像力」の欠如や「頑なさ」も共通して見られるとも感じています。もしかしたら私自身も……。 「想像力」は人間性を広げ、深めていくために不可欠だと思い、これまで過ごしてききました。生徒だけではなく、自分に繋がるすべての人々と、「想像力」を失わず接していきたいと自戒する今日この頃です。

受洗 西堀 眞兄

クリスマスに受洗されました。体調が優れぬとのことで今号には原稿を執筆いただけませんでした。ご回復を祈ります。

CS教師として



高橋 和子

私には無理と思いつながら、お手伝いなら出来まうと言つてCSの教師をさせていだいてから今年で四回目のイースターを迎えます。今年はどうな玉子を子供たちと作つて皆さんに配ろうかと悩んだり楽しんで考へています。

それより主イエスが私の罪を背負つて十字架にかけられたことを知つて感謝し、預言どおり、死からよみがえられたうれしい日であることを子供たちが理解し心から祝つてほしいと願つています。子供は大人をよくみて成長すると言いますから、とても責任を感じます。

教師をさせていただいた一年目は何もわからないので経験豊富な梅田容子先生の指示に従つて大した責任も感じないでお手伝いと思いつながらご奉仕してました。

でもお手伝いと思つていても教師に違いありません。やがて私には無理、絶対出来

ませんと訴えていたCS礼拝の説教を仰せつかりました。「生長」という教本を参考にすれば良いと教えられました。それからこの教本は私の先生です。自分に全く自信のない私はこの教本に教えられて説教しています。初めは教師会でのお祈りもドキドキして唾を飲み込んでばかりいて苦しかった私を、神様は憐れんでくださり背中を優しく押してくださつたのだと思つて感謝しています。

私は今でも教師には向かない、なんの勉強もしてこなかったのが悔やまれます。今からでも出来ることはあります。CS教師の兄弟姉妹がいろいろなことを教えてくださいます。覚えても忘れることが多いですが諦めずトライしようと思つます。

良いCS教師になれるよう神様に祈る日々です。私の周りには素晴らしい兄弟姉妹がいっぱひいます。私のいたらないところをフォローして下さいます。

きつと神様はこれから若い人達を教師に加えて下さると、勝手に思つています。その時まで、米倉牧師、兄弟姉妹に教わりつつ、神様に強め、導いて下さるように祈りながら、頑張りたいと思つます。

受洗おめでとう！

札幌教会と私



松本 脩三

ときどきではありましたが、日曜礼拝に出席させて頂き、いつの間にか何年かがたつたような気がいたします。私ども夫婦は、家内の方の家(高杉)と、私(松本)の方とで、それぞれ宗教の違いがありました。が、両方の両親とも宗教の違いには頓着せず、仲良くやってきてくれました。

高杉家の方は、芳子の母の冬子さんと、私の母の芳子(私の家内と偶然全く同一名)とは、札幌の大学婦人協会会会(昔のことですが、たまたま協会の会長を一年おきに交代で務めたりしておりましたので、始終一緒に仕事をしておりました。母同士は宗教が松本の方は禅宗、高杉の方はキリスト教と異なつていたにも拘わらず、ほとんど毎週のように一緒に仕事をしているのを見ておりました。それにしても私ども、とく

に私の年齢がもう80を超えて一年以上がたち、やはり同じ宗教であるべきことは当然です。数年前からは芳子と共に私も札幌教会に出席させて頂くようになりました。

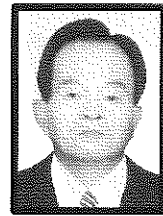
一方また二、三年前かと思いますが、時おり教会員の森様ほか何人かの方からお呼び頂いて、教会外の場合での会合の折に、何か医学に関係したお話を数十名の方々の前で私からお話しさせて頂いたことがありました。そのような交流の機会に伺わせて頂く中に、何となく多くの皆様方と親しくさせて頂けるようになってきたのも事実でございますました。

私の生まれた家は禅宗の家でありましたが、禅は宗教と言うよりも哲学と言つても良いような所がありましたので、仏教とキリスト教と言うような別種の気持ち之余り感じずにいたことも確かです。家内の両親も私の両親も、それぞれはるか以前に亡くなつており、お盆に私の両親の祀られているお寺に参ることは当然ですが、それとは別に家内の両親が始終、礼拝に伺つていた札幌教会で、お祈りさせて頂くことも当然でございます。このような長い時を経まして家内の生まれた高杉家のご両親が、い

つも通つておりました札幌教会に、家内ともどもお伺いさせて頂くことは何よりのことと存じております。

追悼

西堀 光爾 兄



2011年12月24日

兄を偲んで

西堀 義信

兄は、昭和六年釧路の地で父重治と母幸於のもと次男として生まれました。他に三人の姉妹と下に五人の男兄弟を授かりました。ただ長男は小さくして亡くなり、次男である兄（光爾）が実際長男の様な存在でした。時あたかも戦前、戦中、戦後の混乱期とりわけ戦後の食糧難、加えて釧路から弟子屈へと強制疎開に遭遇しました。父は事業が思わしくなかったことで、兄が家の経済的な支えになり、当時小さい弟達の面倒をみたものと思われまふ。弟子屈には、教会がなくわが家では母が中心に聖書研究会のような形で家族と何人かの信者の方々が集まり、主日には、聖書、讚美歌、祈りを捧げていたことを思い出されます。

兄は、勤めを弟子屈、札幌、東京と変え札幌では、北一条教会、東京では銀座の教会に主日を守っていたと聞いております。昭和六十年四男の忠信が大阪の地で五一歳の生涯を終え、残された妻や長男（俊和）が故人が愛唱した讚美歌「山路こえて」を題材に追悼集を出版しました。その追悼集に投稿した兄（光爾）の一文を紹介します。

『紺屋忠信をしのんで』

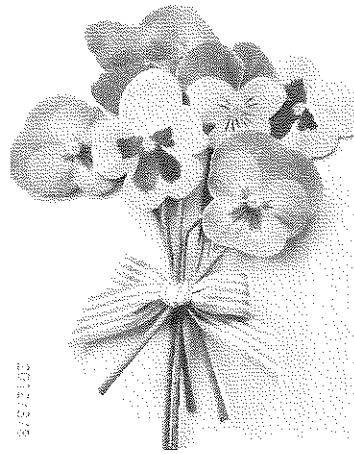
人生は会うは別れの始めとは今現実となった。更け行く秋の夜、皇居のお堀端で佇みて忠信を偲んだ。秋の夜に三日月が池の水辺に青い光を落としていた。忠信の人生ドラマは今もう消えてしまった。草むらでは虫の音が遠く近く鳴っていた。いっしか僕（光爾）の頬は濡れていた。先程の虫も遠くいっしか消えて行つた。そう忠信、夢でまたね。

兄（光爾）は、この世にあつて、大きな大きな財宝を神様から授かった。それは、米倉牧師からの信仰へのお導きによる「洗礼」であろう。神と共にある生活、教会での交わりが短かつたかも知れないが、幸せな生涯を締めくくることが出来たのだと信ずることに平安と安らぎをおぼえる者です。

教会 Do!

花壇に関わる人々

加藤 愛子



加藤愛子

私の教会の花壇の記憶は、四十年近く前からですが、石垣があり、見た目は、あまり変わっていないと思います。

その頃は、CSの子供達が、チューリップや水仙の球根を秋に植えていました。十五年くらい前までCSが関わっていたと思います。その後は、その時々において、出来る人が、出来る時に関わってきました。

ある時、草取りをしていた先輩の姉妹が通りすがりの人が「汚い教会だね」と言ったのを聞き、少しでも綺麗にしようと

心がけているという話を聞きました。それから、私も少しでもお手伝い出来ればと思い、今日に至っています。

最初は、イースターにお花がないのは寂しいと思います、思いついたのがパンジーでした。札幌のイースターは、まだ寒いので寒さに強いパンジーをプランターに入れ、礼拝堂の入口に飾るのが、私の春一番の仕事です。その後は、チューリップや水仙が咲き、バラ、ラベンダー、ユリ等が咲きます。その間に、一年草の苗を植えます。

近年は、観光客の方が写真を撮っていたり、時計台病院の患者さんが、散歩の途中に楽しみにされているようです。

昨年、教会前の創成川が整備されました。今年は、ますます札幌教会にいらつしやる方が増えるのではと思います。これは伝道のチャンスです。教会案内、イースター、特別伝道礼拝、クリスマス、等のちらしを置くなどPRしてはいかがでしょうか。

何年か前から、一人一役で花壇の手入れの係になりましたが、昨年は中村佳世子姉、千葉百合子姉、片桐文子姉、林信子姉と私が担当でした。なかなか全員でする事は出来ませんが、各自が出来る時に、出来

る事をしていきます。他に、牧師夫人、祈禱会にいらした方や、有志の方が草取り等を手伝って下さっています。本当に感謝です。

ここ五、六年の私は、義母の介護もありなかなか時間を取ることが出来なくなりまりましたが、皆様に助けられ、ご奉仕出来る事に感謝しています。

最後に皆様にお願ひがあります。暑い日が続いた時に、なかなか毎日、水やりに行くことが出来ません。もし、カラカラに乾いていましたら、お水をあげていただけると助かります。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

編集

後記

「アツ、教会ガアル、懐かしい、思い、思ッテ来マシタ」。

ある聖日の午後、礼拝堂を訪れたベルー人の女性客。礼拝堂に居残っていた数人と流暢な日本語で会話のあと、独りしばし祈りを捧げて帰って行きました。

世界のどこにいても出会える同じ一人の神。国や民族の違いを超え、同じ神と繋がる私たち。神に在る幸せを感じたひとときです。そして今日はみ子イエス復活の日。

本号の編集は梅田和代、小谷由子、佐々木三郎、鈴木重安、鈴木泰子、田山玲子、深田三枝子をご奉仕しました。